

## 母親の養育態度におよぼす内的ワーキング・モデルと ソーシャルサポートの影響

Influences of Internal Working Models and Social support on Maternal Attitudes to Their Children

森下 正康

MORISHITA Masayasu  
(和歌山大学教育学部)

木村 あゆみ

KIMURA Ayumi\*  
(和歌山大学教育学部)

アタッチメント理論にしたがえば、幼児期に形成された養育態度についての内的ワーキングモデルが、母親の養育態度を規定すると考えられている。しかし、本研究では、たとえ拒否的に育てられた母親でもまわりからの情緒的サポートが豊かであれば、自分の子どもに対して受容的な態度を形成できるのではないかという仮説を検証する。幼稚園の4歳児の母親209名を対象に、自分の子どもに対してどのような養育態度をとっているか、幼児期に自分自身が母からどのように育てられたか、現在、友人・母・父・夫からどのようなサポートを得ているかについて評定を求めた。すべてのデータのそろった120名について分析を行った。

主要な結果は次の通りであった。(1)重回帰分析の結果から、男児に対する母親の受容的態度に関しては夫や父の情緒的サポートの変数が重要で、どのように育てられたかという変数は関連がなかった。女兒に対する受容的態度に関しては、父の情緒的サポート変数と母の統制変数が重要だということが明らかとなった。それに対して、統制的態度については、男児の母親に関しては有意な変数はなく、女兒の母親に関して母の受容、統制という育て方の変数が関連していた。さらに情緒的サポートの影響について分析を進めた結果、次のような点が明らかとなった。(2)男児の母親はたとえ自分の母から拒否的に育てられても、父や夫からのサポートが豊かであれば、子どもに対して受容的態度を形成する可能性がある。つまり、父や夫というように、男児と同性の人からのサポートが重要だと考えられる。(3)女兒の母親は、自分が拒否的に育てられた場合、自分の父や母、夫からのサポートは関係がなく、同性の友人からのサポートが受容的態度の形成に影響する。また女兒の母親は、自分が受容的に育てられた場合、母・父・夫からのサポートによって子どもに対して受容的態度を形成してゆくのにに対して、そのようなサポートが得られない母親は、たとえ子ども時代に受容的に育てられても拒否的な態度を形成してゆく可能性がある。(4)母親の統制的態度に関しては有意な結果が認められなかったので、まわりからのサポートの豊かさは養育態度の統制次元には影響をおよぼさないと考えられる。

**キーワード:** アタッチメント、内的ワーキングモデル、ソーシャル・サポート、養育態度

### 1. 問題

乳幼児期の母親に対する愛着(attachment)の特徴は、子どもの気質と母親の関わり方の特徴との相互作用によって規定される(森下、1988)。また、そのようにして形成された子どもの愛着の特徴は、子どもの気質と相互に関係して、母子分離の特徴に影響を与えている(尾崎、2003)。しかし、Ainsworth et al(1978)のストレンジ・シチュエーション(strange situation)を使って測定された乳幼児の愛着の特徴が、その後の子どもの行動特徴、特に不適応行動と関連があるかどうかについて、従来の研究結果は明

確ではない(森下、1991)。まして、このような乳幼児期の愛着の特徴が、成人になったときにどのような影響を与えるかに関する縦断的研究は少ない(遠藤、2002)。愛着に関する成人期の研究は、再構成された現在の認知内容を扱っており、過去の事実よりも現在の認知過程を重視している。

数井他(2000)は、母親の愛着が子どもの愛着に影響を及ぼすという愛着の世代間伝達を間接的に実証している。つまり、自律・安定型の母親の子どもは愛着安定性が高いということ、未解決型の母親の子どもは安定性得点が低いということを明らかにした。

大学生の対人恐怖心性と親子関係像との関連を、久

保 (2000) は内的ワーキングモデル (IWM; internal working model) の観点から検討している。その結果、対人恐怖心性の高い者は、母親に対して親密さも強いが不信も強いという二重性を示し、さらに父親に対しては親密さ、不信、怯えすべてにおいて否定的であった。このような結果から、対人恐怖心性が高いほど、親子関係像は肯定的なまとまりをもたないということと、受容的な親の存在体験が希薄だという仮説を実証している。

大学生の愛着についての坂上・菅沼 (2001) の研究は、愛着と情動制御との間に関連があることを見出した。つまり、愛着の安定性の高い人は自他の悲しみや喜びに対する内省や覚知が高く、回避性の高い人は悲しみや喜びに対する不快感が高い傾向があり、両価性の高い人は自他の怒りと喜びの覚知が低い傾向があった。

アタッチメント理論によれば、ある設定目標を達成するために、個人は、自分の環境についての内的ワーキングモデルと、自分自身の力量や可能性についての内的ワーキングモデルをもたなければならないという (Bowlby, 1976, 1977; 久保田, 1995)。アタッチメント人物 (多くの場合は母親) についての内的ワーキングモデルは、乳幼児期の母親との相互作用を通して形成される。それは、母親の行動を予測し、母親との実際の相互作用行動をガイドする。ただし、それだけにとどまらずそれは自分自身についての内的ワーキングモデルや他者 (人間) についての内的ワーキングモデルの形成と密接にかかわっている (Bowlby, 1973)。

つまり、自己についての内的ワーキングモデルの中心は、自分が母親からいかに受容されているか、いかに助けを与えられるに足る人物として判断されているかにかかっている (久保田, 1995)。また、乳幼児期の親子関係の愛情 (受容-拒否) 次元は、それが般化され人は一般に信頼できるかできないかという他者に関する内的ワーキングモデルの形成に影響すると考えられる。すなわち、受容的な親子関係から自己に対する肯定感と他者に対する信頼感が、その反対に拒否的な親子関係から自己に対する否定感と他者に対する不信感が形成される。そして、再び人間に対する信頼感にもとづいてお互いに理解し合い支え合うという受容的な人間関係が形成され、人間に対する不信感にもとづいて拒否的な人間関係が形成されると考えられる。例えば、中学生とその親を対象とした酒井他 (2002) の研究では、子が母親と父親に抱く信頼感は、子どもの人間関係を中心とする学校適応に影響を与えていた。また、親友との信頼関係は一般に学校適応を高めると共に、親子相互不信群では反社会的な傾向をも高めていた。

自分がどのように育てられたかにもとづいて、子どもの育て方について内的ワーキング・モデルが形成され、その子が親になったとき自分の子どもに対して同

じような育て方をすると考えられる。このような視点から、虐待の世代間伝達の問題が取り上げられている (西沢, 1994)。そして、一度形成された内的ワーキングモデルは、修正が難しいとされている (Bowlby, 1980)。確かにその影響力は大きく、それが階層構造を形成しているとすれば、修正は易しくない。

しかし、他者に対する信頼感-不信感の形成は、乳幼児期の親子関係だけに影響されるのではなく、その後に関わる重要な他者との人間関係の影響を受けるだろう。つまり、初期の親子関係のあり方が人間に対する信頼感の形成に影響するだけではなく、その後に関わる人間関係が人間に対する信頼感の形成に影響すると考えられる (久保田, 1995)。したがって、たとえ初期の親子関係の中で人間に対する不信感が形成されたとしても、その後の人間関係のあり方によって変容する可能性があるのではないか。人間に対する信頼は、人との信頼関係や受容的な人間関係と表裏一体であるので、子どもに対する受容-拒否的態度は過去の親子関係だけでなく、過去のそれ以外の人との関係や、現在のまわりの人との関係の影響をも受けると予想される。

人間関係の中で、現在の親子間の信頼関係や受容的な関係の形成に影響するのは、まわりの人からの情緒的サポートだと考えられる (森下, 1999; 尾見, 2002)。したがって、子どもに対する受容的態度には自分が乳幼児期に受容的に育てられたという要因以外に、現在まわりの人から情緒的サポートを受けているという要因が影響しているだろう。それに対して、行動の統制に関する次元は、まわりの人からの情緒的サポートよりも、親から統制的に育てられたことからくる内的ワーキングモデルの影響が大きいだろう。

具体的には、幼児の母親が子どもの頃に自分自身の母からどのように育てられたかということが、現在の自分の子どもに対する養育態度に影響する際、現時点における母親自身の友人、母、父、夫からのサポートがどのような影響を与えるかについて検討したい。つまり、母親自身が母から拒否的に育てられた場合でも、まわりからの情緒的サポートが豊かであれば、自分の子どもに対して受容的態度を形成することができるのではないかという仮説を検証する。その中で、誰からの情緒的サポートの影響が大きいかについても焦点を当てたい。本研究の目的は、アタッチメント理論が強調する過去の母子関係の影響力が、後に結ぶ人間関係のあり方によって変容可能かどうかを問うことにある。

## 2. 方法

(1) 被験者: 3つの幼稚園の年中児 (4歳児) の母親 209名が調査の対象となった。その内、200名のデータが回収された。記入漏れなどのないデータは計151で、その内訳は友人・自分の父・母・夫のいる者

は120名(男子57、女子63)、父だけがいらない者31名(男子16、女子15)であった。母親の平均年齢は33歳8ヶ月、子どもの平均年齢は4歳6ヶ月であった。質問紙は園児を通じて配布され園児を通じて封筒に入れて回収された。

(2) 調査時期：2002年9月。

(3) 養育態度の測定：子どもに対する受容と統制に関して小嶋他(1988)および鈴木他(1985)の作成した項目の一部を用いた(表1)。全部で20項目で各項目に対して4段階評定(4. たしかにそうだ・3. まあそうだ・2. あまりそうでない・1. まったくそうでない)を求めた。

自分自身が幼稚園の頃お母さん(あるいはそれに代わる人)からどのように育てられたかについて、上記20項目の表現を変えて作成した項目(表2)に、同じように4段階評定を求めた。

(4) ソーシャル・サポートの測定：情緒的サポートと道具的サポートに関する測定には、堤・萱場(2000)の作成した項目10項目に新たに追加した8項目、計18項目(表3)を用いた。同性の友人、母、父、夫からのサポートについて4段階評定(非常にそ

う思う・まあそう思う・あまりそうは思わない・まったくそうは思わない)を求めた。

### 3. 結果

#### (1) 尺度の作成

各項目に対する4段階評定について、4点から1点と得点化した。次に、子どもに対する養育態度に関する20項目について、151名のデータを、男女児の母親を込みにして因子分析を行った。その手順としては、まず主成分分析を行って固有値の変動に注目し因子数を2と決定し、続いて主因子分析を行い斜交回転により因子パターンを求めた(表1)。また同じように、母親自身が子ども時代にどのように育てられたかに関する項目について、151名のデータについて因子分析を行った(表2)。

二つの因子分析の結果をもとに、そこに共通して受容と統制の各因子に負荷の高い項目を用いて尺度を構成した。子どもに対する親の養育態度について、信頼性係数( $\alpha$ 係数)を算出したところ、受容尺度は比較的高い値であり、統制尺度はあまり高い値ではなか

表1 養育態度に関する因子パターン

項目	受容因子	統制因子	共通性
13. 子どもといっしょにものごとをするのは、あまり好きでない	-.663	.011	.439
3. 子どもと遊んだり話したりするのが楽しい	.646	.186	.463
18. 子どものことが信じられない	-.584	.115	.348
9. よく子どもをほめる	.575	.020	.332
6. 子どもがこわがっている時には安心させてやる	.556	-.133	.320
4. 子どものことにあまり興味をもてない	-.533	-.013	.285
19. 園や友だちのことなど、ゆっくり聞いてやれないでいる	-.525	.082	.278
11. 子どものことに、じゅうぶん気を配っている	.505	.087	.267
1. 子どもといっしょに外出するのが好きだ	.503	.176	.293
16. 子どもの悩みや心配事を理解している	.484	.040	.238
14. いつも子どもの考えや意見を聞く	.362	.050	.135
8. 子どもに頼まれたことを、つい忘れてしまうことがある	-.285	.095	.087
15. 子どものためにどれだけ苦労したかを聞かせる	-.272	.172	.099
5. 子どもに、すべきことはきちんとしてしまいなさいと何回もいう	-.054	.660	.435
7. 子どもに親のいいつけを聞くように厳しくいったりはしない	.173	-.610	.392
2. 子どもが何か失敗したときには、油断したり怠けたりしないようにいい聞かせる	-.066	.591	.349
10. 子どもに家の決まりを守るようにやかましくいうことはない	-.104	-.588	.363
20. いつもがんばりなさいといい聞かせている	.042	.487	.241
12. 子どもが悪いことをしたときでも、軽く注意する程度にしておく	-.051	-.486	.241
17. 親に感謝するのは、子どもとして当然のことと思う	.105	.193	.050
寄与	4.180	2.817	
(%)	(20.9)	(14.1)	



表2 どのように育てられたかに関する因子パターン

項目	受容因子	統制因子	共通性
4. あなたのことにあまり興味をもってくれなかった	-.805	-.100	.608
11. あなたのことに、じゅうぶん気を配っていた	.804	.034	.630
6. あなたがこわがっている時には安心させてくれた	.791	.038	.608
19. 園や友だちのことなど、ゆっくり聞いてくれなかった	-.783	-.011	.607
3. あなたと遊んだり話したりするのが楽しそうだった	.752	.033	.551
13. あなたといっしょにものごとをするのは、あまり好きでなかった	-.721	-.021	.512
16. あなたの悩みや心配事を理解していた	.711	-.026	.517
14. いつもあなたの考えや意見を聞いた	.703	-.004	.496
18. あなたのことを信じていなかった	-.694	.161	.577
1. あなたといっしょに外出するのが好きだった	.650	.134	.387
9. よくあなたをほめた	.628	-.044	.414
8. あなたに頼まれたことを、つい忘れてしまうことがあった	-.401	.034	.171
15. あなたのためにどれだけ苦労したかを聞かせていた	-.382	.200	.233
17. 親に感謝するのは、子どもとして当然のことだと思っている ようだった	-.346	.316	.287
5. あなたに、すべきことはきちんとしてしまいなさいと何回もいった	.051	.716	.493
7. あなたに親のいいつけを聞くように厳しくいったりはしなかった	.034	-.691	.493
2. あなたが何か失敗したときには、油断したり怠けたりしない ようにいい聞かせた	.181	.651	.384
10. あなたに家の決まりを守るようにやかましくいうことはなかった	.100	-.606	.415
20. いつもがんばりなさいといい聞かされていた	-.002	.588	.346
12. あなたが悪いことをしたときでも、軽く注意する程度だった	.045	-.512	.278
寄与	7.300	2.773	
(%)	(36.5)	(13.9)	

表3 サポートに関する因子パターン

項目	情緒的	道具的	共通性
11. お互いの考えや将来のことなどを話し合うことができる	.859	-.106	.664
13. あなたのことを軽視している	-.762	.242	.465
9. あなたの喜びを我がことのように喜んでくれる	.756	.027	.592
12. あなたがどんな物の見方をしているのか理解しようとする	.740	-.028	.528
7. 気持ちが通じ合う	.721	.054	.559
10. あなたの気持ちが裏切られることがある	-.699	.112	.428
8. あなたのする話にはあまり興味がないようである	-.666	.014	.435
1. いっしょにいと気持ちが楽になる	.647	.085	.478
2. あなたになにか困ったことがあって、自分の力ではどうしようも ないとき、助けてくれる	.620	.137	.483
6. あなたの悩みや心配事を理解してくれている	.615	.090	.438
5. 物事をいろいろよく話し合っ、いっしょにとりくんでゆける	.606	.193	.514
14. 友人がいるので孤独ではないと思う	.471	.124	.291
4. あなたのことを避けているような気がする	-.458	-.086	.254
3. あなたにいろいろ気を使っている	.355	-.023	.119
18. 家事をやったり、手伝ったりしてくれる	-.104	.855	.658
16. あなたが病気で寝込んだときに、身の回りの世話をしてくれる	-.115	.841	.629
15. あなたが経済的に困っているときに、頼りになる	.033	.657	.452
17. 引っ越しをしなければならなくなったときに、手伝ってくれる	.230	.653	.620
寄与	7.417	2.113	
(%)	(41.2)	(11.7)	

ったが、その素点の和を尺度得点とした。受容尺度は11項目(3, 9, 6, 11, 16, 1, 14, 13, 18, 4, 19  $\alpha = 0.809$ )、統制尺度は6項目(5, 2, 20, 7, 10, 12  $\alpha = 0.621$ )からなっている。母親自身がどのように育てられたかについて、前記に対応する項目からなる受容(11項目)と統制(6項目)に関して $\alpha$ 係数を算出したところ、受容尺度は0.826、統制尺度は0.683であった。

ソーシャルサポートについては、すべてのデータのそろっている120名分について、サポート源ごとに、同じように因子分析を行った。その内、友人からのサポートに関する結果を表3に示す。すべてのサポート源それぞれについて、第1因子に共通して高く負荷する11項目(項目番号11, 9, 7, 12, 6, 5, 1, 14, 13, 8, 10)にもとづいて情緒的サポート尺度( $\alpha$ 係数は0.908)を、第2因子に高く負荷する3項目(16, 18, 17)にもとづいて道具的サポート尺度( $\alpha$ 係数0.837)を作成した。

それぞれの尺度の内容は次の通りであった。

「受容」 「子どもと遊んだり話したりするのが楽しい」「よく子どもをほめる」などのように、子どものことが好きで、子どもの気持ちや行動をよく理解し、優しく子どもを受け入れるという特徴である。得点が高いほど受容的で優しいことを示す。

「統制」 「いつもがんばりなさいと言いつける」「すべきことをきちんとしてしまいなさいと何回もいう」などのように、親自身の期待を子どもに表明し、しつけをきちんとするという特徴である。得点が高いほど子どもに対する指図やしつけの厳しさを示す。

「情緒的サポート」 人から理解されている、心が支えられているという実感である。得点が高いほど人から受け入れられていることを示す。項目例 ・気持ちが通じ合う ・いっしょにいると気持ちが楽になる。

「道具的サポート」 日常生活において実際的な手助けが必要とき助けてくれるという特徴。得点が高いほど実際のサポートが多いことを示す。項目の例 ・あなたが病気で寝込んだときに、身の回りの世話をしてくれる ・家事をやったり手伝ったりしてくれる。

## (2) 養育態度と育てられ方およびソーシャルサポートとの相関

すべてのデータのそろった120名について、男女別に、子どもに対する受容的態度と統制的態度に関して他の変数との相関係数を求めた(表4)。自分の子どもに対する受容と統制の態度次元の間には、男女とも有意な相関は見られなかった。男児に対する受容的態度は過去自分が受容的に育てられたという評定と有意な相関があった。さらに、受容的態度は、自分の父からの情緒的サポートと有意な相関があり、また夫からの情緒的サポートおよび道具的サポートと有意な相関があった。男児に対する統制的態度は他の変数とは有

表4 受容、統制と他の変数との相関

育てられ方と ソーシャルサポート	男児		女児	
	受容	統制	受容	統制
受容		-.086		.119
統制	-.086		.119	
過去受容	.300*	.143	.465**	.348**
過去統制	.032	.089	.293*	.258*
友人情緒的	.152	.025	.444**	.131
道具的	.014	-.120	.197	.020
母 情緒的	.149	.190	.469**	.194
道具的	.070	.123	.099	.135
父 情緒的	.341**	.133	.514**	.206
道具的	-.024	.053	.074	.122
夫 情緒的	.431**	.033	.344**	.007
道具的	.356**	-.049	.256*	-.012

意な相関はなかった。

女児に対する受容的態度は、過去に自分が受容的に育てられたということ、および統制的に育てられたということとそれぞれ有意な相関があった。さらに、女児に対する受容は、友人、母、父、夫からの情緒的サポートや夫からの道具的サポートと有意な相関があった。女児に対する統制的態度に関しては、過去の受容や統制とのみ有意な相関があり、サポート要因は関連がなかった。

## (3) 養育態度の予測

母親自身がどのように育てられたかという要因と、まわりの人からどのようにサポートを受けているかという要因のどちらの要因が、子どもに対する態度をより規定しているかを明らかにするために、次のような重回帰分析を行った。子どもに対する態度(受容あるいは統制)を目的変数とし、自分自身の母親からどのように育てられたか(受容と統制)と、友人・母・父・夫からの各情緒的サポート、道具的サポート計10変数を説明変数として、男女別に強制投入法による重回帰分析を行った。

その結果、男児の母親の受容に関して有意な $\beta$ 係数は得られなかったが、夫と父からの情緒的サポートが比較的高い値を示していた(表5)。女児の母親の受容に関しては父からの情緒的サポートと母から統制変数が有意であった(表5)。

男児の統制に関しては重相関係数は低く有意な $\beta$ 係数は見られなかった。女児の統制に関しては受容と統制の変数が有意であった(表6)。

以上、受容的態度を予測する変数として、男児に関しては夫や父の情緒的サポートが、女児に関しては父の情緒的サポートと母の統制が重要だということが明らかとなった。このように男女児いずれの母親も自分の父からのサポートが重要な変数だということが注目

表5 養育態度に関する重回帰分析（受容）

	男児		女児		
	β 係数	有意確率	β 係数	有意確率	
重相関係数	.570		.733		
過去受容	.236		.181		
過去統制	.080		.258		p<.05
友人情緒的	-.137		.149		
道具的	.197		.109		
母 情緒的	-.029		.225		
道具的	-.135		-.250		
父 情緒的	.232		.412		P<.05
道具的	-.214		-.153		
夫 情緒的	.307		-.122		
道具的	.187		.200		

表6 養育態度に関する重回帰分析（統制）

	男児		女児		
	β 係数	有意確率	β 係数	有意確率	
重相関係数	.342		.523		
過去受容	.169		.583		p<.01
過去統制	.247		.410		p<.01
友人情緒的	.135		.065		
道具的	-.275		.071		
母 情緒的	.062		-.037		
道具的	.097		-.015		
父 情緒的	-.001		-.244		
道具的	.101		.118		
夫 情緒的	-.058		-.141		
道具的	-.146		-.100		

される。

それに対して、統制的態度について、男児に関してはどのような変数も関連していなかったが、女児の場合は母の育て方の要因が規定していた。その場合、単純に統制的に育てられたら統制的になるというのではなく、そこに受容の要因も関与している点が注目される。つまり、自分の母から受容的であつ統制的に育てられた母親ほど自分の子どもに対しても統制的になるということであった。ここで測定された統制次元は、口やかましいとか干渉的だという意味よりも、きっちりとしつけをするというニュアンスを反映している可能性がある。

(4) 情緒的サポートの影響

過去に母親自身がどの程度受容的に育てられたか、現在自分の子どもに対してどの程度受容的であるか、それぞれの受容尺度の平均値（SD）と中央値を求めた。男女差が見られなかったため、男女を込みにして中央値（表7）を境に2つの次元を組み合わせる4群（拒否-拒否、拒否-受容、受容-拒否、受容-受

表7 受容的態度の得点

	平均値（SD）	中央値
過去の受容度	33.6（6.11）	34.0（15 - 44）
現在の受容度	36.6（4.21）	37.0（18 - 44）

表8 群別の人数

	男児		女児	
	現在受容	現在拒否	現在受容	現在拒否
過去受容	15	14	23	9
過去拒否	11	17	10	21

容群）を構成した。分割の結果における、子どもの性別、群別の人数を表8に示す。尺度間の相関係数は男児0.300、女児0.465であった。そのことを反映して、表7から特に女児の母親の場合、過去の育てられ方と現在の養育態度が一致する者が多い。男女いずれも、過去に拒否的に育てられたが、現在子どもに対して受容的な者が少なからずいることが注目される。

次に、サポート得点について、各サポート源の平均値を示したのが図1である。父親からのサポート得点が相対的に低いことがわかる。

各サポート源からの情緒的サポート得点間の相関係数を求めた。表9に示すようすべて正の相関である

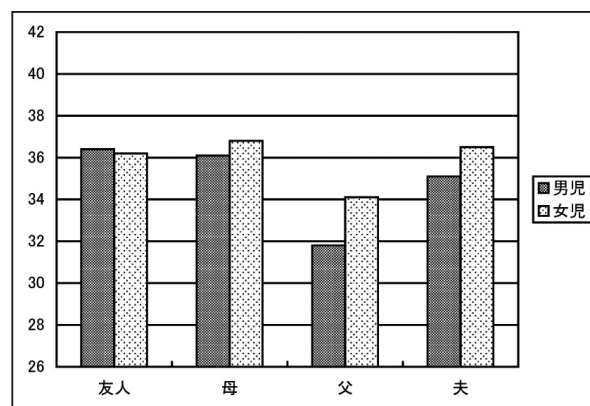


図1 サポート源ごとのサポート得点

表9 情緒的サポートについてサポート源間の相関

	友人	母	父	夫
友人		.335**	.246	.426
母	.125		.795**	.470*
父	.256	.377**		.405**
夫	.366**	.141	.330*	

(注) 左下は男児の母親、右上は女児の母親の結果

が、特に女児の母親において自分の母からのサポート得点が他のサポート得点と相関が高かった。

母親自身が自分の母から受容的に育てられた場合は拒否的に育てられた場合よりも、まわりの人からのサ



ポートが多いかどうか、さらに拒否的に育てられた場合でもまわりからの情緒的サポートが豊かであれば、自分の子どもに対して受容的態度を示すかどうかを明らかにするために、次のような分析を行った。まわりの人からの情緒的サポート得点を従属変数とし、子どもの頃に受容的に育てられたか拒否的に育てられたかという要因（過去）と、現在子どもに対して受容的か拒否的かという要因（現在）の二つの要因を独立変数として分散分析を行った。それぞれの分割には、それぞれの受容尺度得点の中央値を用いた。したがって、受容的態度とか拒否的態度といっても、その内容は相対的なものになっている。

分散分析では、まず各群における友人・母・父・夫からの情緒的サポート（今後は単にサポートと表記）の総得点を従属変数として、子どもの性別ごとに2（養育態度）×2（育てられ方）の2要因の分散分析を行った。その結果、図2に示すように、男児の母親は過去の育てられ方要因に有意差があり、受容的に育てられた母親の方が拒否的に育てられた母親よりもサポート総得点が高かった（ $F(1, 53)=10.886, p<.01$ ）。また、子どもに対して受容的な母親の方がサポート得点が高いという傾向があった（ $F(1, 53)=2.682, p=.10$ ）。その傾向は特に拒否的に育てられた群においてみられた。女兒の母親に関しては、二つの要因が有意で、さらにその交互作用（ $F(1, 59)=7.742, p<.01$ ）も有意であった。つまり、受容的に育てられた群の方がサポート総得点が高く、さらに子どもに対して受容的な群の方がサポート総得点が高かった。そして、受容-受容群の情緒的サポート総得点が特に高いことが明らかとなった。

次にサポート源ごとに分析した結果、友人からのサポート（図3）は、男児の母親に関しては有意差がなかった。それに対して、女兒の母親に関しては二要因とも5%水準で有意差があり、母親は受容的に育てられた方が友人からのサポート得点が高く、また、子どもに対して受容的な母親の方がサポート得点が高かった。つまり、たとえ拒否的に育てられた場合でも子どもを受容している母親の方が友人からのサポート得点が高かった。

母からのサポートに関して（図4）、男児の母親は、受容的に育てられた母親の方が有意に母からのサポート得点が高かった。女兒の場合、二つの要因とその交互作用が有意で、受容的に育てられた群の方が母からのサポート得点が有意に高いということと共に、受容-受容群のサポート得点が高かった。

父からのサポートに関して（図5）、男児の母親では受容的に育てられた母親の方が有意に父からのサポート得点が高く、さらに拒否的に育てられた群では、子どもに対して受容的な母親は父からのサポート得点が高いという傾向があった。女兒の場合、二つの要因

とその交互作用が有意で、特に受容-受容群の父からのサポート得点が高かった。

夫からのサポートに関して（図6）、男児の母親に関しては有意差がなかったが、拒否-受容群のサポート得点が高いという傾向があった。女兒の母親に関しては交互作用が有意で、受容-受容群の夫からのサポート得点が非常に高かった。

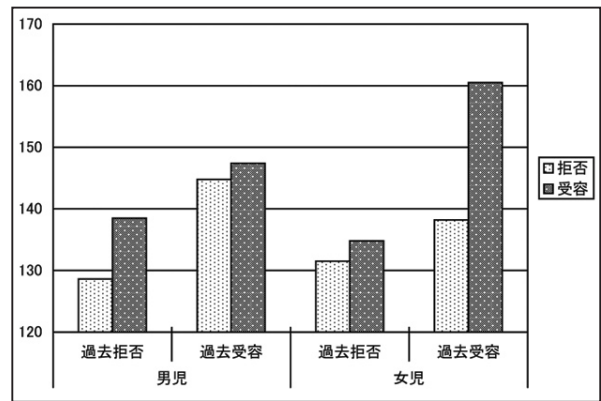


図2 各群の情緒的サポート総得点

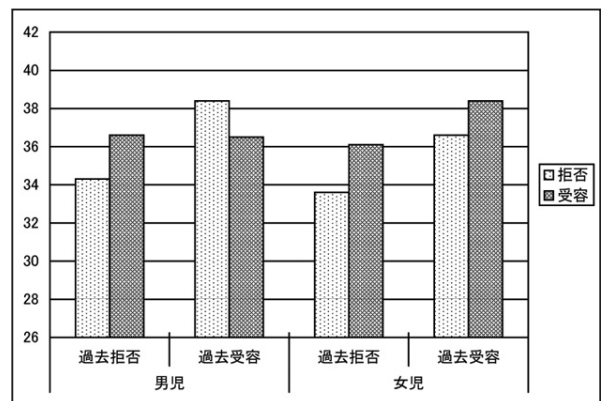


図3 友人の情緒的サポート得点

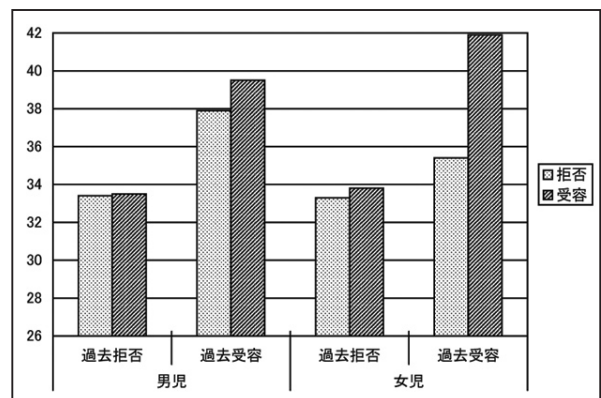


図4 母の情緒的サポート得点

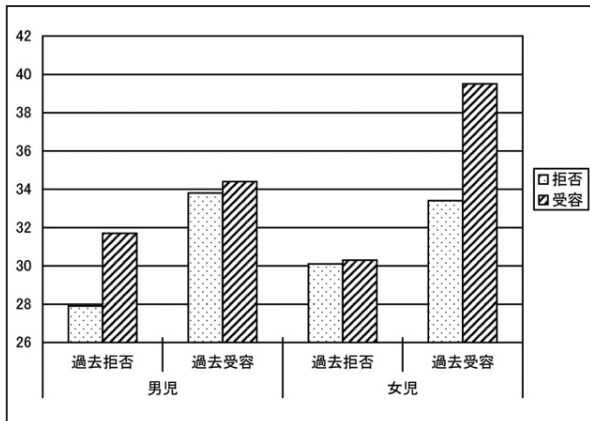


図5 父の情緒的サポート得点

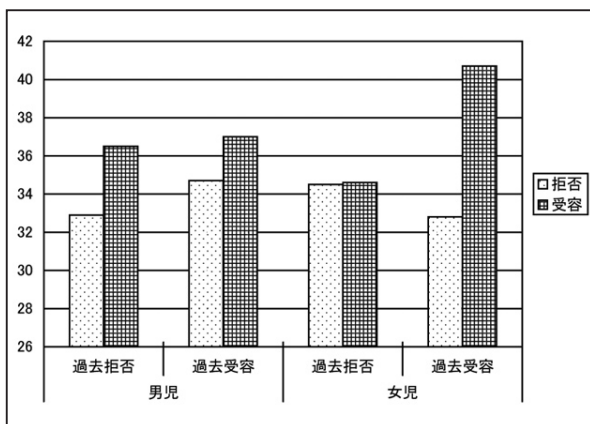


図6 母の情緒的サポート得点

以上のサポート源について結果を要約すると次のようになる。男児の母親について、受容的に育てられた母親は自分の母と父からの情緒的サポート得点が高かった。また、拒否的に育てられても子どもに対して受容的な母親は父からの情緒的サポート得点が高いという傾向があった。有意差はないが、そのような傾向は夫からのサポートについても指摘できる。

女児の母親について、受容的に育てられた母親は友人や母、父からのサポート得点が高かった。そして、受容的に育てられても拒否的に育てられても子どもに対して受容的な母親は、友人からの情緒的サポート得点が高かった。また、受容的に育てられかつ子どもに対して受容的な母親は母、父、夫からの情緒的サポート得点が非常に高いという特徴があった。

統制的態度に関して、同じような分析を行ったが、有意差はぜんぜん認められなかった。

#### 4. 考察

本研究の主要な目的は、幼児期に母から拒否的に育てられ場合でも、まわりの人から十分な情緒的サポートが得られれば、自分自身の子どもに対して受容的な

態度を形成することができるのではないかとという仮説を検証することであった。研究の結果は、男児の母親について、たとえ自分の母から拒否的に育てられても、父や夫からの情緒的サポートが豊かであれば、男児に対して母親は受容的な態度を形成する可能性があることを示唆していた。ここでは、男児にとって異性である母親の友人や自分自身の母からのサポートは効果がなく、自分の父や夫というように、男児にとって同性の人からのサポートが、母親の受容的な態度の形成に影響を与えていると考えられる。つまり、母親は自分の母から拒否的に育てられ拒否的な養育態度という内的ワーキングモデルを形成したとしても、自分自身の父や夫から豊かな情緒的サポートを得ることによって、男児に対する拒否的な態度が修正され受容的な態度へと変容するのではないかと考えられる。そこには他者に関する母親の内的ワーキングモデル、特に男子に関する内的ワーキングモデルの変容が媒介しているかもしれない。男子に関する内的ワーキングモデルが肯定的なものになることによって、男児に対する養育態度も肯定的（受容的）なものに変容したのではないかと考えられる。あるいは、自分自身の父や夫との受容的な人間関係が、自分と男児との関係に般化した可能性がある。

女児の母親は、自分が拒否的に育てられた場合、自分の父や母、夫からのサポートではなく、友人からのサポートが受容的な態度の形成に影響していた。つまり友人からの情緒的サポートが豊かであれば、女児に対して受容的な態度を形成する可能性がある。この場合も自分や子どもにとって同性の友人からのサポートということが重要な点であるかもしれない。

特に女児に対しては、過去における母親自身の母と自分との関係をだぶらせている可能性が強い。男児の母親に比較して女児の母親の方が、自分が幼児期にどのように育てられたかという養育態度の特徴と、現在自分の子どもに対する養育態度との相関が高かったことが、そのことを物語っているだろう。そのようななかで、同性の友人からのサポートが、過去における自分の母との否定的な関係やそこから生じる否定的な自己に関する内的ワーキングモデルを変容させ、自己と同性である自分の子どもに対する態度をもより肯定的なものに変容させている可能性がある。

以上の点から、過去の母親との関係のなかで形成された養育態度はその後結ぶ重要な他者との関係のあり方によって、変容する可能性があると考えられる。視点を変えると、自分が受容的に育てられた場合は、母・父・夫からのサポートによって子どもに対して受容的な態度を形成してゆくのにに対して、そのようなサポートがまわりの人から得られない母親は、たとえ子ども時代に受容的に育てられても拒否的な態度を形成してゆく可能性がある。

統制的態度に関してはこのような有意な結果が認め



られなかったので、まわりからのサポートの多さは、養育態度の統制次元には影響をおよぼさないと考えられる。統制的態度は、女兒の母親の場合は特に幼児期にどのように育てられたかという要因が関与しているらしい。

アタッチメント理論から、母親自身がどのように育てられたかという要因は、現在の対人関係のあり方に影響すると考えられるので、まわりの人からのサポートの特徴にも影響するだろう。事実、受容的に育てられた母親は拒否的に育てられた母親よりも、まわりの人たちからのサポートが豊かであった。しかし、そのサポートの特徴が、逆に過去の母親自身の育てられ方の認知にも影響しているかもしれない。したがって、現時点での母親自身がどのように育てられたかという認知は、過去の事実と現在の対人関係の特徴の両方を反映していると理解しなければならないだろう。

特筆すべき結果は、幼児期に受容的に育てられ、現在子どもに対して受容的な母親（特に女兒の母親）は、まわりの人から多くの情緒的サポートを得ていたということである。過去における母親との肯定的な関係、現在子どもとの肯定的な関係、そして現在夫や友人、父母との肯定的な人間関係は基本的なところでつながっているのは事実である。

本研究の問題点は、細かく分析するにはデータ数が少ないということがあげられる。このようなデータ、特に夫や両親からの情緒的サポートに関する内容は個人のプライバシーにかかわることなので、データ収集が困難であるが、この点は今後の課題である。また、母親からの報告のみに基づいたデータである点も問題点の一つである。

本研究においては、主としてアタッチメント理論の枠組を基礎におきながら、その批判をも含みながら結果を解釈してきた。基本的にアタッチメント理論のようなメカニズムが働いているのかそうでないのかは、本研究からは決定できない。このような点を明らかにするためには今後、縦断的な研究が必要であるし、多方面のデータ源から多数のデータを必要とする。さらに、母親自身の自己や他者に関する内的ワーキングモデルの内容を明らかにしなければならないだろう。

\* 和歌山大学教育学部心理学専攻（第51期）

（追記 研究にご協力くださいました幼稚園児の保護者の方、先生方に深く感謝いたします。）

## 引用文献

- Ainsworth, M. D. S., Blehar, M. C., Waters, E., & Will, S. 1978 Patterns of Attachment: A psychological study of strange situation. Hillsdale, NJ: Erlbaum.
- Bowlby, J. 1969 Attachment and Loss, vol. 1: Attachment.

- London: Hogarth. (黒田実郎・大羽 葵・岡田洋子(訳) 1976 母子関係の理論 I: 愛着行動 岩崎学術出版社) II
- Bowlby, J. 1973 Attachment and Loss, vol. 2: Separation. London: Hogarth. (黒田実郎・岡田洋子・吉田恒子(訳) 1977 母子関係の理論 II: 分離不安 岩崎学術出版社)
- Bowlby, J. 1980 Attachment and Loss, vol. 3: Loss. London: Hogarth. (黒田実郎・吉田恒子・横浜恵三子(訳) 1981 母子関係の理論 III: 対象喪失 岩崎学術出版社)
- 遠藤利彦 2002 情動体験の内在化 須田 治・別府 哲(編著) 社会・情動発達とその支援 29-44. ミネヴァ書房
- 数井みゆき・遠藤俊彦・田中亜希子・坂上裕子・菅沼真樹 2000 日本人母子における愛着の世代間伝達 教育心理学研究 48, 323-332.
- 久保 恵 2000 対人恐怖心性と認知的・投影的親子関係像—内的ワーキングモデルの観点からの検討— 教育心理学研究 48, 182-191.
- 久保田まり 1995 アタッチメントの研究—内的ワーキングモデルの形成と発達 川島書店
- 森下正康 1988 乳幼児期の発達と家族関係 原野広太郎他(編) 児童心理学の進歩 金子書房
- 森下正康 1991 母子関係 松田 星(編) 新・児童心理学講座第12巻 家族関係と子ども 第2章 Pp. 31-72.
- 森下正康 1999 「学校ストレス」と「いじめ」の影響に対するソーシャル・サポートの効果 和歌山大学教育学部紀要(教育科学) 49, 27-51.
- 西沢 哲 1994 子どもの虐待: 子どもと家族への治療的アプローチ 誠信書房
- 尾崎康子 2003 愛着と気質が母子分離に及ぼす影響—2, 3歳児集団の継続的観察による検討— 教育心理学研究— 51, 96-104.
- 坂上裕子・菅沼真樹 2001 愛着と情動制御—対人様式としての愛着と個別情動に対する意識的態度との関連— 教育心理学研究 49, 156-166.
- 酒井 厚・菅原ますみ・眞榮城和美・菅原健介・北村俊則 2002 中学生の親および親友との信頼関係と学校適応 教育心理学研究 50, 12-22.